

いといってよい。字源からすれば、一方は「阜」、他方は「邑」であって、全く別の字であるが、唐以前に、しんにょう「辵」と同様に、著しい変化を上げて、同一形になっていた。（『五経文字』では、そのたて画の末を、とめるか、針のようにするかで区別しているが。）

「起」は『康熙字典』に「起」、しかるにその表音部分は、従来しばしば「己巳巳」三形の間で問題にされてきた形である。「当用漢字」としては、「巳」「巳」のそれぞれ単独の字形は採用されていないので、これらの形はすべて他の字の部分として現われるわけであるが、「起記」のほか、「選改配紀妃」のいずれにしても、いまこれを区別する必要は認められない。『康熙字典』では、「選」が「巳」、「妃」が「巳」であるが、すべて単独の「己」にならうことになった。そしてさらに、「包飽砲胞抱」などのもとの「巳」や「港遷卷圈」などのもとの「巳」までもこれに統合することになった。（「腕範犯危」を除く。）

これらに類似した、小異統合の例としては、なお、

「灰炭の𠂇」を「厚岸などの𠂇」に合わせて「灰炭」、

「次姿資諮のニ」,「盗のシ」を「冷准凝のシ」に合わせて「次姿資諮盗」、

「顔産の𠂇」を「立」に合わせて「顔産」（ただし「奇」の類はもとのまま「大」）、

「肺の市（一巾）」を「市姉の市（一巾）」に合わせて「肺」、

「輸諭愉のㄩ」を「前などのリ」に合わせて、「愉諭輸」、

「闘」のかまえを「門」に合わせて「闘」、

「匹匿區などの匚」,「匠の匚」,「臣の匚」,「巨拒距の匚」をすべて「匚」に合わせて「匹匿区匠臣巨拒距」、

「普虚などの卝」を「業並、また新たに靈織顯湿などの业」に合わせて「普譜虚」、

「麻摩魔の尗」,「曆歴の秝」を「林」に合わせて「麻摩魔曆歴」（ただし、「術述の朮」は「朮」）、

「虜の𠂔」, 「勇の用」を「田」に合わせて「虜勇」,  
 「姫の臣」を「臣」に合わせて「姫」  
 などがあげられる。

「絶」の右を「色」にしたのは, 「色色」の類形を合わせたのであるが, また, 部分的に『康熙字典』における「危喚象負衡角急陷」等の「勺」と, 「魚勉色」等の「ク」と, 「兔」の「刀」, さらに「争」の「爪」を合わせた一類に属するものでもある。これに関連して, 「没」の右は, 「爻」に, 「頼瀬」の右は「頁」にそれぞれ全体の類形として合わせられた。「教」の左を, 「孝」に合わせたのもこれである。「致」の右部分は, 従来普通の活字では(教科書体も), このとおり4画のぼくじょうであるが, 字書では3画の「夂」を正字としている。それからすれば, これも異体の統合である。

「衛」にはもと「市」を「丰」にした異体があるが, 「偉緯違」に合わせて, その異体のほうをとった。字源的にはむしろ「韋」の下に「市」をだいた形がもとであって, かつては, その「丰」を略していたのを, 今はその「市」を略した形をとったことになる。すでに教科書体もこの形であった。

「舎捨」はもと「舌」であったのを「土口」にした。類形がある点からいえば, 必ずしも変更の必要はなかったかも知れないが, 筆写での由来の古い一つの習慣が用いられたのである。

#### (4) 一点一画が増減し, 又は画が併合したり分離したりした例

者者 黄黄 郎郎 歩歩 成成 黒黒 免免

右のうち, 「者黄郎」の3例は, 1点を減じたもの, 「歩」は1点を加えたもの, 「成黒」はもとの2画を1画に併合したもの, 「免」はもとの1画を2画に分離したものである。

「者」は, いうまでもなく「煮都諸緒暑署」に及ぶ。「黄」は「横」の場合も同様, なお, 「動謹」「難漢嘆」もこの例である。「郎」は「廊朗」に, さらに食へんの場合に及ぼされる。1画を減ずるものは, 右のほか, 「突臭戾類」など, 字の下部にあってあまり識別の役に立っていないと思われ

る「犬」の点を省いた例、「寛」「逸」「殺」の点を省いた例、「奥」の中の「ノ」を省いて「奥」とした例、「搖謠」の「缶」の「ノ」を省いて「搖謠」とした例（ただし「陶」の場合はもとのまま）、「隆」「徳聴」「穀」「徴」の「一」を省いて「隆」「徳聴」「穀」とした例などがある。「騒」では、もとの「𠂔」の2点を省いて「又」に合わせた。

1点を加えた「歩」は、「資」も同様であるが、これは「少」の字に合わせたといえることができる。同様の形は「歳」にもあったが、これは「小」に合わせて、「歳」とした。

2画を1画に併合したもののうちで、「成」は「盛誠城」に、「黒」は「黙墨」に及ぶ。「黒」のように2点を1画にしたのは、「練錬欄」の「束」を「東」にした例、「僧憎贈増層」の「曾」を「曾」にした例、「每敏繁海悔侮梅」の「母」を「母」にした例もこれである。「東」は、「ひがし」の「東」や「凍」また「陳」と統合されたわけであるが、表音の観点からは問題があり、また「欄」などは、「墨」とともに、かえって横画が込んだ難がないではない。「每」以下は、たてに並んだ2点の併合であって、かつ、すでにあった「毒」の形に統合したものであるが、この点の併合は、単独に用いられる「母」の場合には及ぼされなかった。「母」の2点は最も印象的な部分であり、「每」以下はすべて「㇇」を冠した形で、直接「母」を部分とするものではないからである。

「温」の右上の「凵」を「日」としたのも、この類の例である。似た形としては、「掲謁渴」の「凵」の部分を「ヒ」にした類がある。

「及級吸扱」の「及」は、字源的には4画のもの(『康熙字典』で又部の2画)であるが、これを「秀」の「乃」と同じ筆使いにして、その第2、第3画を1画に続けたような形にした。この形はまた、活字体として「攴」と同じであるが、「攴」もまた字典では3画に数えている。すなわち「乃」と「攴」と、同じような形を、従来は2画と3画とに数えわけていたのであって、「及」を3画に数えるか4画に数えるかは問題であるが、とにかく字体表で

は、「乃及及」の折れた線の作り方を、同じ形に統一したのである。

草かんむりの「艹」や、「夢」「敬」「備」の上の「艹」は、従来も普通の活字では、「共」「散」などと同様に、3画のように作られていた。しかし、戦前の文部省の教科書体活字では、これらを「++」また「+」のように4画に作っていたのであって、筆写体の基準としては、画数の減じた例になる。「華」の中ほどにある「艹」も、「乗」「垂」と同じ形に、画数を減じた。「乗」「剩」はもと「乗」であった。(教科書体では、「垂」も「++」であった。古くさかのぼれば、「葬」の「艹」や「共」の「艹」も、「+」になるはずのものであった。)

また、当用漢字表の131字の簡易字体に含まれている「併」(併)「研」(研)「並」(並)もこの類である。(字源的には、「形刑型」も「研」と同じ部分を持っている。)

「差」「着」「養」は、従来の筆写では、「羊」のたて画と次の「ノ」とを結合して1画にする習慣もあった。たとえば大正8年の『漢字整理案』はその形をとっている。これは「看」「寿」などに類似の形がないわけではないが、字体表では、もとのままに2画の形とし、後の『筆順指導の手びき』では、「羊」とはちがって、「王」と同じ筆順がとられた。

もとの1画を2画に分離した「免」は、「勉晚逸」も同様で、上部分は「象」の上部分と同じく、下は「光兄」等の下と同じようになった。同様の場合は、「肺」を「肺」にしたもの、「卑碑」を「卑碑」にしたものにある。「肺」の「市」は、表音部としてはたしかにおかしいが「市姉」の類形に統合したのである。「卑」の下部分は類字がないが、上部分は「鬼」と同じ形になった。

「充」「育」「流」などの「女」は、字源的には、「一」をはさんで点と「ム」とを分けた4画にすべきものではない。字書には3画の形に作ったものもあるが、これを4画にするのも由来が古い。(『康熙字典』では「充」「流」そのものでは3画に数えているが、他の同系字はみな4画に数えている。)

「確」の右部分は、「ㄣ」と「佳」との重なった形である。これを「ㄣ」と「佳」とに分ける書き方もあるが、当用漢字としては「確」1字のことであるので、もとのままに止められた。

以上のうち、戦前の教科書体がすでに採用していたものを襲ったのは、「良食」の類、「成」の類、「併」「研」「並」の類、「免」の類、「充」「育」「流」の類である。「及」を部分に持つ字については、戦前の教科書体に、字によって3画型、4画型に見える不統一がある。

#### (5) 全体として書きやすくなった例

亜亞 儉儉 兎兎 昼晝

この類は、画の併合という以上に筆使いを便化したもので、全体としての印象をあまり変えずに簡略にしたもの、また草書の筆法を楷書として固定させたものがある。ここで全体というのは、1字全体でもあるが、また1字の構成部分としての、あるまとまった形についてもいう。また「書きやすく」とあるのは、全体的に見られる形に関していうのであって、この(5)の類のみが書きやすい形というのでは無論ない。したがって、他の類との間に、はっきりした境界がひかれるわけではない。

「亜」は「悪」も同様である。「悪」には古く「𪛗」の形もあるが、単独の「亜」にならうことになった。「儉」は「劍驗險檢」も同様である。「兎」は、「稻」「陷」の場合とともに、「舊」が「旧」をとったように、「白」の部分の草体を固めたのである。「晝」は、「晝」を「尽」にしたのと同じく、「聿」「辨」の草体に由来する。これらと同源の「書」は原形のまま、「晝」は別に通用した「画」をとって、「尺」の形には合わされなかった。「尽」の「𪛗」は、「皿」の最も簡略化されたものである。

この類に属するものは、すでに当用漢字表の131字の中に、数多くある。

学覚(𪛗) 挙誉(興) 劳营荣(𪛗) 仮(假) 実(實) 当(當) 円(圓)  
 図(圖) 写(寫) 寿铸(壽) 売(賣) 歛観勸権(藿) 両満(兩) 届(屆)  
 参(參) 浅錢残踐(𪛗) 豊(豐) 惱腦(惱) 獮(獵) 数楼(婁)

断繼(繼) 齒齡(齒) 肅(肅) 属囑(屬) 恋変蛮湾(戀) 齋剂濟(齋)

通(遞) 靈(靈) 麦(麥) 滝(瀧) 発廃(發) 潜(潛) 賛(贊)

などがそれにあたるであろう。このうち、「挙誉」の簡易化されたのは、「與」の部分であるが、「與」そのものは、字体表では(7)の例として「与」の形がとられた。

字体表で新たに加わったものには、

為偽(爲) 嬢讓釀(襄) 敵単戦禅弾獸(獸) 巢(窠) 桜(嬰) 楽薬(樂)論

愉輸(兪) 将奨壯莊装状寝(冝) 従縦(從) 織(織) 懐壞(裒) 様(樣)

搜(叟) 焼暁(堯) 乘剩(乘) 峽挟狭(夾) 帯滞(帶) 頭湿(濕)

雑粹碎醉(卒) 即節慨概郷響爵(臯) 虚戯(虛) 録録(録) 縁(縁)

真慎鎮(眞) 礼社祈祉祖祝神祥禍福禪(示) 撰(撰) 洩(洩) 墨(墨)

右のうち、「論」の類、「即」の類、「録」の類は、文部省の教科書体がすでにこれであった。

「撰洩墨」は、三重形の下二つを便化するものであるが、「品」「操」や「森」には及ばない。「區」は(8)の例で「区」となり、「疊」「蟲」は(7)の例で「疊」「虫」になる。(「澁」には「澀」の本体があるが、通俗の形をさらに簡易にしたのである。)

「囙」のごとく、変形の経路の必ずしも明らかでないものもあるが、右の大部分は、筆写の習慣としては先例があり、もしくは説明がつく。

## (6) 組立の変った例

黙黙 勳勳

この両例は、ともに「里」「重」の部分にも、2点を1画にした(4)の類の変化があるのであるが、ここに掲げたのは、部分の間の変化のためである。すなわち、字の左部分にある「黑」または「熏」の下の4点が字全体の下部分として広がり、したがって、もとの右部分にあった「犬」「力」が上のほうへ幾分退縮した。右部分と左部分とが、点画構成の複雑さにおいてあまり違うので、「烈」や「照」などと同じ組み立てにして、全体の安定